

靴の中に見た靴

韓國短篇童話集 韓丘庸・編訳

夜中に見た靴

韓國短篇童話集 韓丘庸・編訳

韓韓韓韓韓

夜中に見た靴——韓国短篇童話集

韓 丘庸 編訳

〔編訳者プロフィール〕

韓 丘庸 (Han Gyu-Yong)

一九三四年、京都府向日市に生まれる。

神戸市立外国語大学、天理大学卒業。

一九六七年、有志と京都児童文学会創立、創作、評論活動を精力的に続ける。

著書に、長編『海への童話』『ソウルの

春にさよならを』、短編集『灰色の雨の

兵隊』翻訳『ウンボギの詩』他あり。

現在、日本児童文学者協会、京都児童

文学会に所属。サリコ児童文学会を主

宰す。

現住所 〓京都市上京区五辻通七本松上

ル老松町六〇一—九

一九八八年七月十五日 初版発行

定価 八〇〇円

発行 株式会社エスエル出版会

西宮市鳴尾町二丁目十三

電話〇七九八—四六—六八—三三

ファックス〇七九八—四三—二七—三三

発売

株式会社 鹿野社

西宮市鳴尾町二丁目十三

電話〇七九八—四六—六八—三三

ファックス〇七九八—四三—二七—三三

挿絵・装幀 西村吉彦

印刷 株式会社地水社

落丁・乱丁はお取り替え致します。

0098-80541-9233

夜中に見た靴

韓国短篇童話集 韓丘庸・編訳



夜中に見た靴 崔仁鶴
チェインハグ・作



005

ほとけさまが笑った 辛忠幸
シンチュンヘン・作



023

星李元寿
イワナミ・作



043

風雨の中でも 朴洪根
パクホングン・作

067

花ぐつ 姜小泉 (カンソチヨン)・作

107

空をとぶ コスモス 孫東仁 (ソンドンイン)・作

129



七月の子どもたち 崔仁勲 (チェインフン)・作

147

解説「現実参与」の児童文学をめざして 韓丘庸 (ハングヨン)

185



夜中に見た靴



崔仁鶴・作

崔^최仁鶴^{인학}（一九三四—）

慶尙北道金泉市に生まれる。ソウル明知大学文学部卒。慶熙大学大学院を経て、東京教育大学院修了。現在、ソウル仁荷大学教授。韓国民俗学会会員。

著書に『韓国伝来童話全集』『朝鮮昔話百選』『大むかでたいじ』等あり。民話研究の第一人者である。

短編「夜中に見た靴」(밤중에 본 신)は児童文学誌『篝火』(一九六九年一月号)に掲載されたものである。

チヨルホは夜がきれいです。

夜がきれいな子はチヨルホだけじゃなくて、ほかにもずいぶんいることでしょう。チヨルホはそのうちの一人です。

そのかわり夜の好きな子もたくさんいることでしょう。そんな子には、夜が童話の翼を広げて、夢の国をさまようように、とても楽しいことでしょうから。夜空には星がきらきら輝いて、かくれたり顔を出したりしていますし、また道では、小さなからだを電柱の後ろにぴたっと上手にくっつけて、かくれんぼしている近所の子どもたちの遊び声が、いつまでも楽しく聞こえています。

チヨルホにも夜がやって来ます。

チヨルホにも夜空があれば、きらめく星もあります。近所の子どもたちとかくれんぼごっこもして遊びます。でも、なぜかひとつも楽しい夜じゃないのです。

どうにかして、チヨルホは「一晩中でも近所の子どもたちと遊べたらいいのになあ」と心で思ったりするのです。

でも子どもたちは、チヨルホの気持ちなんか知らないで、

「もうやめようか」

「うん、あたかも家に帰ろうつと……」

などと、それぞれに散っていきます。

こんなとき Cholpo はほんとうにさみしくて、やりきれないのです。

家がないからじゃありません。たった三つしか部屋はありませんが、部屋はいつもきちんきちんと整とんされています。音がじゃんじゃん鳴るステレオもありますし、テレビもあります。

もちろん、貧しいからじゃありません。

今年三年生になる Cholpo。学校へ行けば、ほかの子どもたちはみんな Cholpo をうらやましがります。杜門谷^{トウモンゴル}はいちばんの前線地区^{*}なのです。子どもたちはどの子もみんなぼろぼろの綿入れパズをはいて、あかのついた汚れたふろしきに本をつつんで学校へ来るのです。それにひきかえ、Cholpo は皮靴に洋服、ランドセルを背負って、こざっぱりと着かざって学校にやってきました。

クラスの同級生たちは、Cholpo の家はお金持ちだと思っています。

*前線地区
軍事分界線のアメリカ軍基地を指している。

ある日のこと、クラスの子どもたちがチヨルホにたずねてみました。それは二か月前にチヨルホが杜門谷に引っこしてきて、学校に編入した日のことです。

「おまえの家は金持ちか？」

「うん」

チヨルホはいいそびれることなく、すぐさま答えました。

「だったら、なぜ、こんなへんぴなところへ引っこしてきたんだい？」

チヨルホはことばがつかまってしまいました。

「金持ちだったらソウルに住めばいいじゃないか……」

「……」

「ここでもアメリカ軍部隊にうまくつついて金もうけた連中は、ソウルに行って暮らしているというのにさ。おまえの家は金持ちだっていうのに、どうしてこんなところに来て住むのかな？」

「……」

チヨルホはだまったまま、先に立って歩いていきました。

チヨルホがさみしいのはお母さんがいないからでもあります。

お母さんはチヨルホをとててもかわいがっています。病氣になればなんとか早くなおそうと、病院にだつて入院させたりもします。

一週間に一度はソウルに行つて、チヨルホの服や学用品など好きなものを買つてきたりします。

チヨルホもお母さんが大好きです。

チヨルホはお母さんがいつも口ぐせのように

「あたしはね、チヨルホ一人を頼りにして生きてるんだよ。あたしがこうやつて生きているのも、みんなチヨルホのためなんだよ」

と、いくどもいくどもくりかえしているのを一度だつて忘れたことがあります。

通りはまたもとの静けさにもどりました。子どもたちはみんな家に帰つたのか、話声ひとつしません。

チヨルホはやがて、気がぬけたように歩いていきます。戦争のない前線地区はまったくうらさびしいかぎりです。ときたまずっしりした国軍のトラックがヘッドライトを照らしながら通り過ぎるだけです。

チヨルホは表の玄関の戸をそつとあけます。すぐ横手のはなれがチヨルホたちの借家しやくやです。いつもはなれのすべてを借りきつていますので、チヨルホ自身の家とまったく同じことです。チヨルホは台所へ続く小さな板戸をゆつくりとあけてみました。そして、台所のほうをすかして見るのです。それはチヨルホのいつものくせでした。

あんのじよう、見なれないチヨコレイト色のウォーカー*が、お母さんのはきものと並んできちんと置かれています。

チヨルホは音をたてないように板戸をしめました。そして表通りのほうへさつと出ていきました。

からだをかめるとチヨルホの手はしらずしらずのうちに、地面に何かをかいているのです。満月が真昼のように明るくチヨルホの指先を照らしていました。

チヨルホは絵をかきました。それは台所の向こうのあがり口にあつたウォーカー*とコムシン*です。またもう一度かきます。こんどは短靴とかかとの高いハイヒールです。そして、またかいてみるのです。もう一度かいてみます。

*ウォーカー

軍人のはく皮靴。

*コムシン

朝鮮の女性がはく
ゴム靴。

チヨルホは靴をかくのは自信があります。毎晩見るあがり口にぬいである靴はいろいろと違ったりしました。ときには同じものもありました。お母さんの二つ三つしかありません。

チヨルホはぬいである靴を見て、一人考えてみます。

「この人は心のやさしい人かな？」

「たぶん靴が平たいから、これはものすごいでぶっちょだな」

「この靴は先がとがっているから、背高のつぽのおじさんだ」

こんなふうです。しかし、チヨルホの思いどおりに当たった日はほとんどありません。それは想像だけで、その靴の持ち主を見たためしがないからです。でもチヨルホはじぶんの考え通りに信じています。まちがっていてもいいのです。じぶんの思ったとおりになつてくれさえすれば、それでいいのです。

ずいぶんしてから、うしろで表戸のあく音がしました。

「まあ！ チヨルホじゃないの、どうしてまたそんなところに坐ってるのよ？」

家主のおかみさんです。練炭れんたんの灰を棄すてようと外へ出てきたところでチヨルホを見つけたのです。



「チヨルホ、さあ家におはいり……」

おかみさんはチヨルホの手を引っぱりました。しかたなくチヨルホは引っぱられるままに中へはいりました。

「さあ、ここへおすわり、かわいそうに……。手が冷たいだろうに。ほら、足をこっちへおいれ……」

おかみさんはとても親切にしてくれます。とてもありがたい人です。

チヨルホは部屋の下手のほうで横になりました。からだがほかほかしてきます。まぶたがふさがっていきます。いつのまにか眠ってしまいました。どれほど眠ったかしりません。

眼をさしました。

「もう少し眠りなさい」

その声はあのおかみさんではありませんでした。

「さあ、目をつむりなさい」

チヨルホはベッドに眠っていることをしるや、ぱっとお母さんの手を引っぱりました。

「お母さん！……」

チヨルホはお母さんのふところにだかれました。

「お母さん、お客さんはもう帰ったの？」

「そうよ、とつくに帰ったよ……」

チヨルホはもううれしくてたまりません。お母さんといっしょのこんな夜が長かったらいいのになと思います。

夜は短いんです。もう朝なのです。

「朝ごはんの用意をしてくるからね……」

「いやだ！ いやだ！」

「ごはんを食べて、学校へ行かなきゃ……」

チヨルホは目をつむりましたが、ひとつも眠れませんでした。

チヨルホが校門をはいつていくのを見てから、やっとお母さんは家にもどってくるのです。